

保育計画成果報告書

法人名等	社会福祉法人 幸輪会
施設名	うきは幸輪保育園
報告者（役職）	荘野 陽太郎（事務長）
住所・連絡先	〒839-1401 福岡県うきは市浮羽町朝田277-1
	☎ 0943-77-8877
	E-mail info03@ukiha-kourin.jp

○タイトル（保育計画）

「子育て」と「高齢者介護」の未来予想図

○主な助成備品

テーブルベンチ シーソー 屋外時計

1. 保育計画策定の目的

当園は同じ敷地内に老人ホームを建設した「幼老連携型」施設です。これにより、子どもと高齢者の継続的な関わりが生むことによる相乗効果について検証し、「子育て」と「介護」という2つの社会福祉が抱える課題を解決する新しいモデルの構築を目指しています。

そのため、両施設は園庭を挟んで向かい合っており、保育園は平屋、老人ホームを2階建てとしメインの居室を2階部分に配置することで、子どもたちの声が自然と老人ホームに届き、その声に誘われて子どもたちの様子を眺めたり、園庭に出て一緒に遊んだりすることができるようになっています。

そして、園庭は運動会もできる広さがあるため、この広さを活用した子どもたちと高齢者のふれあいの場を持つための環境作りとして、今回の助成を活用させていただきました。

ふれあいによって、高齢者からお話を聞いたり、歌や遊びを教えてもらったりと、自分ができることができる年長者を敬う心や伝統文化に触れて人間としての幅を身に付けることや家族や職員以外の様々な人との交流により、社会性や社交性を育むとともに、心を許せる大人が身近にたくさんいることを知り、子どもの情緒の安定を図ります。

一方で、自分より身体的に衰えがある高齢者に対して一緒に遊ぶための配慮や相手の立場に立って考えて思いやる心が芽生えてくることも目的としています。

2. 具体的な実施内容

子どもたちと高齢者のふれあいについては、「イベント・行事化しない」「自然な形で」「日常的に」といったことを約束事として、どのように進めていくかを双方の施設の職員とで検討を重ねていきました。

当初は、子どもたちに担当の高齢者を決めて、登降園時に居室まで挨拶に行く。というふれあいの方法を考えていましたが、どうしてもクリアできない問題が2つありました。

1つ目は、両施設の活動時間が異なるということ。保育園は午前9時に全員が揃いますが、老人ホームでは午前9時以降、入居者個別の活動が始まってしまいます。

2つ目は、両施設が同じ棟ではないために、どうしても移動の際に職員を配置しないといけないこと。昨今の保育士・介護士不足もあり、決して余裕のある人員配置ではないため、登降園の時間帯に常に職員を配置することが難しい状態でした。

その様な状況の中試行錯誤を重ねて、お昼前の20分程度の時間を使って、当番の子どもたちが老人ホームの食堂に向いて、日替わりで一緒に手遊びをしたり、おもちゃで遊んだり、歌を歌ったりという形で日常的なふれあいの時間を持っています。

とはいえ、決め事はこれだけです。

入居者の平均年齢が88歳のため気候にもよりますが、園庭で遊ぶ子どもたちの元気な声に誘われて、一緒に園庭で遊んだり、子どもたちの様子を眺めたりと自然な形での交流に、助成で購入したテーブルベンチやシーソー、屋外時計を活用しています。



3. その成果と評価

当初よりこの幼老連携の取組みは、高齢者側には何らかの効果が現れるだろうことは推察できていました。実際に、認知症が進み車いすで歩けなかった方が、この取組みで毎日子どもたちとふれあううちに、表情も豊かになり歩くことができるようになった事例もありました。

一方で、子どもにとっての効果が出るのかどうかという点については、当園が人口3万人程度の地方部に立地するため、いわゆる核家族世帯よりも3世代以上の同居（近居）世帯が多く、効果が出てもこの取組みによるのかどうか、因果関係をどう検証するかが難しい課題でした。とはいえ、まずはアンケートをとってみようということで、保護者にアンケートを実施しました。

すると、以下のような回答を得られました。

- ・街で知り合いの高齢者とすれ違った際に、今までは全く挨拶できなかった子どもがちゃんと挨拶できるようになった（人見知りが減ってきた）。
- ・ふれあいの際に、高齢者に肩たたきをしていたようだが、それを“自発的”に両親にしてくれるようになった。
- ・若い世代の母親が知らないような手遊び歌や童謡を、高齢者から教えてもらい、自宅で披露してくれるようになった。
- ・スーパー等で足元がおぼつかない高齢者を見ると、気にして心配するようになった。
- ・兄弟以外の年下の子どもに、自分のお菓子を分けてあげたりするようになった。

といったように、このわずかな期間に子どもたちにも社会性や他人を思いやる心が芽生えてきていることが分かってきました。

視察や取材も多数いただいております、この取組みが地域の社会福祉が抱える課題の一つの解決事例になりうるのではないかと手応えも感じています。

4. 今後の課題と展望

この取組みが、核家族化が進行していない地方部でも一定の効果が得られたことから、都市部ではもっと顕著な効果が出ると考えています。今後、既存施設の建て替えや新規開園の際には、原則として幼老連携型施設での展開を進めていきたいと考えています。

また少子高齢化の先駆事例として海外からの取材や視察も受けています。ゆくゆくはこの形をモデルとして海外へも広めていきたい。という壮大な想いも出てきています。

一方で、この取組みの成果を、保護者へのアンケートだけではなく、客観的に検証をどのように進めていくのかという課題があります。今後は、大学等とも連携してより精緻な効果検証を進めて、この取組みがこれからの社会福祉の解決事例として広く認知されるまで頑張っていきたいと思っています。

以上